



森林・林業再生元年

国際森林年記念シンポジウム

〈森を歩いて感じよう！
森林から始まる北海道の未来〉



2011・国際森林年

国際森林年のロゴマークは、「Forests for People [人々のための森林]」という、国際森林年のテーマを伝えるものです。
森林は私たちの住む家や食べもの、水などの供給、生物多様性の保全、気候変動の緩和など様々な働きをもっています。
ロゴマークのデザインには、私たちが生きていく上で欠かせない、森林の大切な役割を共に考えましょうというメッセージが込められています。

北海道森林管理局企画調整部企画課

国連は、今年2011年を「国際森林年」と定め、世界の国々が地球上の森林を将来にわたり持続的に経営し、守っていくための契機とすることになっています。

世界では森林の減少が問題になっていますが、日本の森林の蓄積は増加しています。それにもかかわらず、我々の生活は森と切り離され、放置された日本の森林は間伐などの手入れが遅れています。そんな今、私たちに求められるのは、こうした実態を知ったうえで資源としての森林の恩恵を日常に活かすことです。そのため、日本では、国際森林年のメインテーマを「森を歩く」としています。森を歩くことは、林業の現状認識や子どもの教育に役立つだけでなく、都市生活で低下しがちな大人の気力、体力の向上にもつながります。

ここ北海道において、豊かな森林を未来に引き継ぎ、その様々な恩恵を私たちの子どもや孫たちが享受できる社会を築いていくためには、まずは私たち一人ひとりが自分なりの目標をもち、森を訪ねてみるのが大事です。

このため、北海道森林管理局では、9月11日、札幌男女共同参画センターにおいて、国際森林年記念シンポジウム「森を歩いて感じよう！森林から始まる北海道の未来」を開催しました。

シンポジウムでは、国際森林年子ども大使による国際森林年アピール宣言や溝畑宏観光庁長官の記念講演、パネルディスカッション、映画「葉っぱのフレディーいのちの旅」の上映を行いました。

主催者あいさつ



津元 頼光 氏
北海道森林管理局長

森林は、国土を守る、水をつくる、そして貴重な動物や植物を育てる、木材を供給する、そして最近では二酸化炭素の吸収源としても大きく注目されています。

今年は、国連が定める国際森林年です。今、世界では北海道の森林と同じくらいの面積の森林が地球上から毎年なくなっており、国連が「人々のための森林」

をテーマに、世界中で森林の大切さを訴える取り組みをする年として決めました。日本でも国内委員会を開催し、葉っぱのフレディを子ども大使として、「森を歩く」をテーマに国際森林年に取り組んでいます。皆さんが身近に森を感じ、森林が果たす役割や木を育てて使う林業の営み、さらには木材を石油や石炭などの資源の代わりに使うことで、温暖化防止や地域振興にも役立つことを、一人でも多くの方に知っていただきたいと思います。

森林管理局でも国際森林年の取り組みを全道各地で行っています。森林、林業、木材のことを考えていただければ大変ありがたいですし、この貴重な森林を次世代に引き継いでいくことも、私どもの大きな役割と考えています。

来賓あいさつ



のろた
野呂田隆史 氏
北海道水産林務部長

前回の国際森林年は1985年でしたが、この年は日本の林業、木材産業にとって大変大きな転換の年であったと考えています。当時は北海道の木材自給率が60%を超えていましたが、その後年々減少し、2000年には過去最低の34%まで低下しました。道ではこのことに危機感を持ち、

2002年に全国で初めて森林づくり条例を制定、翌年には森林づくり基本計画を策定し、林業の再生に取り組んできました。

北海道には戦後植えたカラマツ、トドマツ、スギなどの人工林がありますが、今ではカラマツ材を中心に北海道の木材自給率は約6割まで回復しました。

また、北海道の森林がもつ優れた景観や癒し効果は、観光資源としても大変魅力があります。カラマツ林は秋には黄金色の大変美しい景観を醸し出し、エゾマツやトドマツなどの天然林も冬には雪を被って雄大な景色をつくっています。そういう点で、林業の再生も重要なテーマですが、北海道の森林は観光資源としても大変貴重であると考えています。

東日本大震災や福島第一原発の影響もあり、本道においても外国人観光客が減少して大変大きな影響を受けています。本道への観光の回復を図るため、首都圏でのキャンペーンや海外への知事のトップセールスなどにより、本道の観光の安全と魅力をPRしています。今後も国内外からの滞在型の観光を推進するため、国の観光圏整備事業などの支援をいただきながら、魅力ある観光地づくりに取り組んでいく考えです。

記念講演

観光立国の推進と森林の可能性

世界に通用する日本の森林は宝の宝庫



溝畑 宏 氏
観光庁長官

子どものころ、私は京都の山で過ごしたのですが、近所の森の仙人のようなおじさんが森との付き合い方、森のルールを教えてくださいました。山を歩きながら岩をひっくり返し、岩の下にいっぱい微生物がいて仲良く共生する様子を見せられ、「自然の中では人間もその中の一員なのだから、仲良くせんとあかん」と教わりました。

観光庁長官になって思ったことは、日本の森はすばらしいものであり、もっと森を知らなければならないということです。おいしい魚を食べることができるのも立派な森があるからです。

日本の森は世界でもトップレベルと感じています。四季折々の気候や湿度、島国であることにより大陸の国のようにいろいろな外来種が来て淘汰されるのではなく、共生があり四季折々の変化があります。こうした素晴らしい森林を、我々の祖先が我々の世代まで大切に守ってきたと思っています。

日本の森林は宝の宝庫です。登山、ラフティング、森林浴、エコツアーリズム、グリーンツアーリズムなど。森の中には出会い、交流、感動、教育・人づくり、そして観光につながる、バラエティに富んだいろいろなものがあります。国際森林年があると聞き、林野庁と連携し、日本国民あげて森を楽しむ、森と一緒に共生

することを、観光という手段を通してできないのかと考えました。

昔から日本人が当たり前のように享受してきたものを改めて見つめ直す、そして現代人が失った感性をもういっぺん取り戻す。これをぜひ、国全体で国際森林年の中で普及していきたいと思っています。

観光は総合的戦略産業

「観光は総合的戦略産業」です。日本各地域に魅力あるものは文化やスポーツ、医療などからいろいろありますが、人に喜び、幸せ、感動を与え、人を引きつけるものが観光資源です。非常に範囲が広く、当然のことながら森林も観光資源として大切になってきます。

少子高齢化・人口減少の中で経済が活性化するには、海外からヒト、モノ、カネを引っ張ってきて、内需を活性化する必要があります。観光は、日本の魅力を海外に向けてアピールし、海外から実際に日本に来ていただく中で、日本のものに興味を持ち、将来、顧客になってもらうという側面があります。

韓国は、文化観光政策として、15年ほど前から観光に文化を使いました。東アジア太平洋地域諸国にドラマをどんどん出しました。ドラマの中で韓国の生活文化、例えば自動車、携帯電話を見せることが、韓国製品の輸出につながっていったのです。そして韓国の生活文化に興味を持たせ、韓国に来てもらうというように、観光はすべての産業の内需を取り込む突破口でもあるのです。

そして、観光の持つもう一つ大きな意味は、人と人との交流です。結果的に、世界平和や国際交流に大きく貢献していきます。

観光の原点は自分の住んでいるところを愛すること

人口が減少する中で、経済が活性化するためには交流人口を拡大させ、地域ならではのモノを、地域の人々が掘り起こしブランド化する必要があります。観光の原点は、自分の住んでいるところを好きになり、そして愛することです。愛するためには、まずは知らなければなりません。そして好きになり、愛し、それをみんな

に表現していくことです。

そうした過程で、もう一つ大切な作業があります。それは住んでいる人が、そこに住んでいることに対して誇りを持つことです。住んでいる人がお通夜みたいの下を向いて、「もうあかん」と言っている地域には誰も寄り付きません。立派なホテルや施設よりも、まずは住んでいる人間がとにかく明るく、楽しいということが大切です。そして、そのためには、まずは自分のアイデンティティを好きになることが大事です。

日本は世界に負けないものがいっぱいあることをもう一回みんな認めて、磨きをかけ、ローカルでも世界的な評価のものをつくっていく、お互いに競争し合い、地方であることを言い訳にせず、そこからトップを目指すという自立意識、競争意識は、観光では重要な要素です。日本人が持っている価値をみんなで共有し、そこからもう一回世界に出てトップまで上がっていく、そういうハングリーさが今の日本には必要だと思います。

いつも周りに対し、幸せや喜びのオーラを出せない者が、外から来た人に魅力をアピールすることはできません。鉄則は、まず自分が人生を楽しむ、一日を明るく生きていくことです。地域はそういう意識改革をしていかなければならないのです。北は北海道から南は沖縄まで、日本はこんなに美しいと、おじいちゃん、おばあちゃん、子どもまで、みんなが自慢話を始めるような地域になる。これが観光立国の究極の姿です。そういう意味で我々がやらなくてはならないのは、各地域にそういうことを掘り起こす、考える舞台を作る、そして世界に対して売り込む効果的なプロモーションをつくる、これが観光庁の存在価値です。

森林づくりにかかわられている皆さんに感謝したい。日本の観光は、皆さんのおかげで非常に素晴らしい観光資源を有することができたのです。この素晴らしい財産について、国民みんなが理解し、日本の森林を守る方々と一緒に、観光立国日本をつくっていきたいと思います。

パネルディスカッション

森を歩いて感じよう！

森林から始まる北海道の未来

北海道の森林の現状と問題提起



パネリスト

松本 芳樹 氏

北海道森林管理局企画調整部長

北海道には、道面積の7割強、我が国の森林面積の5分の1強に当たる554万haの森林があります。これは、道民1人当たりになると1haと我が国平均0.2haの約5倍に相当します。

しかし、森林・林業が北海道経済に占める位置づけを見てみると、昭和40年ごろには林業、木材産業を合わせて10万人程度の雇用力がありました。今は1万人強の雇用力しかありません。北海道の7割強を占める森林で1万人の雇用しか創り出せない。こんなことでよいのでしょうか。

北海道の森林資源は人工林を中心に充実しつつありますので、そこから生み出されるフローとしての木材を活用する林業、木材産業を再生させると同時に、ストックとしての森林を活用するアウトドアライフ、観光、教育、森林療法等を通じて地域経済を元気づけることが重要になっています。

北海道の森林と未来について先住民族としての思い



パネリスト

貝澤 耕一 氏

NPO法人ナショナルトラスト・チコロナイ代表(平取アイヌ文化保存会事務局長)

北海道は、元々はアイヌの国です。私たちの先祖は、生活に必要なものは、ほとんどすべて自然の幸を利用しながら生きていました。日本政府は旧土人保護法をつくり、アイヌ民族を無理やり農民に仕向け、野山を切り開き、アイヌの生活の場を奪いました。

かつて、直径2m、3mという大木があった、森林の島であった北海道、これを取り戻すには200年、300年かかってしまいます。しかし、私たちは、北海道の自然を壊した責任として元に戻さなければならない。今、国で管理して

いる北海道の森林をアイヌ民族に管理させてほしいと思っています。

北海道の森林が荒れることに伴い、アイヌ文化の伝承に必要な植物も減ってきています。私たちのNPO法人は、私たちの子どもや孫たちに引き継ぎながら何世代も先の人々のために北海道の自然林を再生し、豊かな森の復活を目指して活動しています。

私たちは、子孫に何を残すべきか、過去の過ちをどうつぐなうのかを考えて行動する必要があります。面倒くさいと思う方が多いと思いますが、まずはあまり考えず、森に関する行事や勉強会などに楽しみながら参加して体験してみてください。森から始まる北海道の未来については、それから考えるのが一番いいと思います。私たちには、北海道の森林に関わり、元に戻す義務があるのです。

北海道における林業・林産業の実状と今後の展望



パネリスト

吉田 良弘 氏

(株)ヨシダ代表取締役(北海道木材青年団体連合会事務局長)

北海道というと一般的に広大な自然、森林が豊富というイメージがあると思います。過去には豊富で良質な天然林の木材が生産され、道内、国内のみならず海外にまで輸出し非常に栄えた時期もあり、林業・木材業者の数も多かったと聞いています。しかし、良質の天然林資源を使い果たしてしまい、木を植え育てている間は国内の木材量だけでは足りず輸入材に頼らなければなりません。

現在は植えた木が成長して利用する時期ですが、北海道の木材は本州から見て、安く、量もたくさんあると見なされ、外国の製材と競合となります。我々は非常に不安定な環境の中で商売しているのが現状です。

里山のように身近な部分については、ぜひ皆さんがふれあう場所として活用し、その整備をボランティア等でやっていただけることは素晴らしいことです。木育で五感や感性を磨き、生き方を学ぶ、ここから得るものは大きいと思います。ただ、実際に山奥で木を植えたり伐ったり整備する際には、我々専門家がきちん

と責任を持って管理し、資源の状況を守りながら林業・林産業を行っていくことが重要です。

観光資源としての北海道の森林の課題と可能性

北海道の自然は何よりも広がりがある。道南のブナの森に行けば空気も緑になるような、阿寒・根室に行けば針葉樹林の素晴らしさに、これが北方の針葉樹林だと、お客様も喜んでいてと思います。ただ残念なのは、北海道に原始の森・大自然を見に来ているのに、どこもかしこも人の手が入っている。これからは国有林を林業の木材生産という観点だけでなく、新しい価値感でも管理するべきだと思います。

今、森に対して人々の関心が高まってきていて、エコツーリズムに参加する人などは森のことを良く知っていて、森に入って木が伐られていると、北海道も大したことはないと思うはず。本物を見抜く人が出てきているという認識で対応しないと、国内外からのお客様を呼ぶことができないでしょう。特に海外からのお客様は難しい。

これから観光資源として売れる森林は、傾斜が緩やかで森の中に入って歩いて、森に包まれる、そういった森林だと思います。ただ、森を歩くということは地味ですから、観光としてトレーニングされているガイドが人々と森とを引き合わせる事が重要となります。過疎で高齢化した村でも、ガイドという新しい職業によって若者たちが山村に住めるという状況をつくっていくこととなりますから、地域づくりにも重要で総合的に考えていかなければなりません。もっと歩ける森、北海道のシンボルツリーであるエゾマツの森を道民が感動を持って見られるような森を取り戻していくことが、北海道の未来へとつながる行動ではないかと思っています。



パネリスト
三木 昇 氏
北ノ森自然伝習所主宰
(北海道アウトドアガイド協会理事長)

木育という北海道発のライフスタイル



パネリスト
煙山 泰子 氏
KEM工房主宰(木育ファミリー代表)

「木育」とは、「木とふれあい、木に学び、木と生きる」という、豊かな森林と木材に恵まれた北海道生まれの新しい言葉です。すべての人が木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです。「木」には、森の中で生きる「緑の木」と人の手によって伐り倒された後に木材として活きる「茶色の木」の二つのいきる時間があります。その二つの「木」がバランス良くなかって、保たれていくことが大切です。普段の生活の中で「緑の木」とふれあうチャンスがありません。であれば、身の回りの「茶色の木」から森を感じてはどうでしょうか。子どもたちは木のおもちゃと遊ぶ。この木が育った森は、この木は元はどんな姿だったのだろう。自分の手の中にある木から森を感じ、想像する。そういう機会をぜひ増やしていきたい。木は私たちと一緒に生きてきた地球の仲間という気持ちになれるように、いろいろな機会を作っていくことが大切です。どれだけ木や森とふれあう生活をしているかが大事なことだと思います。

木を五感を通して感じることで、北海道の人々の暮らし、木や森との付き合い方、いきる姿を北海道に暮らす人々はもちろん道外の方にも誇りを持って見せていければと思っています。

北海道における森林療法の実態と可能性



パネリスト
瀧澤 紫織 氏
医療法人こぶし植苗病院精神科医師(日本森林保健学会事務局長)

森林は子どもから認知症の高齢者の方まで平等に恩恵を与える素晴らしい存在です。高度な認知症の方が、その日に食べたものを忘れてしまっても、森で散歩し家族と面会したことを1週間後も覚えていて驚かせてしまいます。

大切なのはライフスタイルと森が結びついていることです。東京都

3000人の高齢者に5年間追跡調査を行ったところ、緑のある散歩道に住んでいる方は有意に長寿との結果や、イギリスで4000万人に行った調査では広い森の近くに住んでいる人は全死亡率と循環器疾患の死亡率が低いという報告があります。ただ、1人当たりの森の面積が本州の5倍もある北海道の人がみんな長生きかと言えば必ずしもそうとは言えない。森林があっても歩いているか、歩きやすい森林が身近にあるかという話になります。森に歩いて入っていかないと健康に結びつかないということです。人々を自然や森の中に誘う仕掛けや仕組みが必要だと思えます。

森を利用するにはいろいろな人の協力が必要となり、新しい人間関係、コミュニティが生まれます。森を中心に、お年寄りも子どももいろいろな地域の人々が一つの新しいコミュニティをつくる。そうした新しい森と親しむ新しい文化ができれば、特に私の分野のメンタルヘルス疾患は少なくなるのではないかと思います。そういった社会が未来に向けて実現したらいいと思っています。

北海道観光と森林の可能性



ゲストコメンテーター
溝畑 宏氏
観光庁長官

森に関わりたい、森でいろんなことをやりたいという人はいっぱいいます。例えば、登山、森林浴、ラフティング、エコツーリズムもそうです。それをつなげていくときに観光は非常に重要な役割を担います。これから観光を語るときには、森林との関わりや教育というものを、必ずそのプラットフォームに入れていくことが必要だと思いました。

また、森は修行の場でもあります。日本のお坊さんが修行するときには必ず森の中に入っていきます。これは我々の祖先が恵みをいっぱいいただいた神なる森に対して、もう一度原点に返り考える必要があるからだと思えます。こういった原点を伝えるのが教育であり、観光であるわけです。

皆さんにぜひお願いしたい。貝澤さんがおっしゃっ

たように300年かかるかもしれませんが、世界の人たちがこんなに素晴らしい森があると言って、この北海道に巡礼に来て、すべてが満たされ幸せになれるという森を見られるようにするという覚悟で、一人ひとりがこれから森に関わっていただきたい。北海道から「世界の森巡礼メッカ宣言」をして、素晴らしい森をつくっていただきたいと思えます。

自然の循環の中に私たちはいる！



コーディネーター
柿澤 宏昭氏
北海道大学大学院農学研究院教授(森林・林業基本政策検討委員会委員)

これまでのお話の共通のキーワードは、地域、人、歴史・時間です。地域ごとに多様な森があり、その森をどうしていきたいのか、どんな利用の仕方があるのか、地域の中で考える必要があります。子どもを含めて、人と森とをつなぐことが大事だと皆さんお話しされていましたが、そのつなぎ役を果たす人がいることが重要です。森林と人、人と人をつなぐことができる人を育て、より豊かな森と社会との関係をつくっていくことが大事です。

また、今ある社会も森林も長い歴史の中でつくられてきたものです。その歴史を踏まえ、反省すべきことは反省し、学ぶべきことは学びながら、これから先のことを考える必要があると改めて感じます。森は刻々と動いていく存在です。ある断片で森を見るのではなく、常に動きつつある自然として森を見ることが大事です。私たちは木材や紙などいろいろな形で森の恵みを使って生活していますが、使っても人間が木を植えれば新たな森をつくっていくことができます。そうした循環の中に私たちがいることを考えつつ森づくりをすすめる必要があるのだということを、皆さんのお話を聞いて思いました。森を訪ねたときに、今日の議論を思い浮かべながら、改めてこれから先の森づくり、自分と森との関係を考えていただければと思います。